

---

# バカとテストと召喚獣 Original Story

古泉 楓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 Original Story

### 【Nコード】

N0941U

### 【作者名】

古泉 楓

### 【あらすじ】

文月学園文月祭の準備中に、瑞希と美波に追いかけられる明久。逃げ込んだ教室は、HRが始まる直前だった。そこで転校生がいることを知らされ……。一体どうなることやら。

小説タイトルが変更になりました。申し訳ありません。

## 第1話 転校生

「うおおおおおおお！」

「まあてえ！」

「待てと言われて待つバカはいない！」

「あ、自分がバカだって認めた」

「ああ！ しまった！」

やっぱりバカである。このバカっぽい男の子は、吉井明久君。観察  
処分者。

「たく。なにやってんだ？ 鬼に捕まるぞ」

こちらは、Fクラス代表、坂本雄二君。

「待ちなさいよ！ アキ！」

こちらは、数少ない女子の1人、島田美波さん。

「そうですよ、明久くん。待ってください。痛くありませんから」

こちらも数少ないFクラスの女子の1人、姫路瑞希さん。

以上が、メインキャラである。これ以外にもいた気がするが、それ

は後々紹介するとして、現在は、文月学園学園祭の真っ只中である。各クラスでお店を出し合うのだが、Fクラスは中華喫茶ヨーロッパピアンというわけのわからないものになっていた。

「わけのわからないものって失礼な！ これでもちゃんと考えてんだよ！」

「おい明久、誰に向かって怒ってんだ？」

「読者」

「おいおい。もしかしたらいないかもしれない読者に対して怒ってどうするんだよ」

「それもそうか」

まったくもって失礼な話である。さて、話を戻すが、文月学園学園祭の準備中の間違いだった。失礼。明久は、美波と瑞希に誘われて、屋上でお弁当を食べていたのだが、少しは上達した瑞希のお弁当と、自分のお弁当、どちらが美味しいか選んで、という美波からの無茶ぶりから逃げているのだ。

「無茶ぶりというかなんというか。まあ、お前がそうやってバカなことをやっているのは見ていて楽しいが、なぜ俺まで逃げる羽目になるんだ」

説明しよう、明久が逃走中に、偶然、翔子に会い、翔子に雄二が翔子の食べ物はず過ぎ過ぎて食べられないって言ってたと言ったからである。

「てめ！ 歯をくいしばれ！」

「黙れ！ ツンツン頭！」

「なにやっとなるのじゃ？」

この爺言葉を使う、一見美少女の男の子木下秀吉。

「ああ、秀吉！ 助けて！」

「また何かしょうもないことをしたんじゃないのか？」

「違うよ！ 美波の質問に答えなかったから、こっぴなってんだよ」

「いっている意味がまいわからんが、とりあえずかくまえばいいんじゃない？」

「うん！ お願い！」

遅れること5分後。

「全く！ アキつたら、どこに逃げたのよ！」

「あ、木下君。明久君知りませんか？」

「いんや？ こっちには来ておらんぞ」

「じゃあ新校舎の方に行ったのね！ 行くわよ！ 瑞希！」

「はい！」

いつも以上に気合が入っている瑞希と美波。ま、当然と言っちゃ当然だな。なにしろ、ねえ。

「うむ。行ったようじゃぞ」

秀吉が廊下の様子を確認しながら、段ボールに隠れているはずの明久に声をかけた。

「んむ？ おらんのう」

「ふう。やっと行ったか」

「お主ら、一体何やっておるのじゃ？」

「丁度いいゴミ箱があったので、入ってみた」

「お主らと言っちゃつらは・・・」

「おい、席につけ！」

教室の扉を開けて、鉄人が中に入って来た。一説によると、鉄人の周囲は温度が他より2度ほど高いらしい。

「転校生を紹介する。はいりたまえ」

「転校生？ この時期にか？」

「どうもみなさん。初めまして。鳳仙ほうせんそら青空あおぞらといます。よろしくお願ひします」

これからどんなことが待ちつづけていることやら。

## 第2話 それが僕らの日常

第2話 それが僕らの日常

「へえ〜。鳳仙さんっていつんだ」

「はい」

「.....」

「ねえ、どづしたの？ 雄二。前回からずっと黙りっぱなしだよ？」

前回から黙りっぱなしの雄二のもとへ明久が近付いて行った。



「いや。何か見たことがあるような気がしてな」

すると、雄二が青空がずっとこっちを見ているのに気が付いた。

「なんだ」

「……。何でも」

青空はスッと立って、教室を後にした。

「……。。どうしたのよ、坂本。じっと見つめたりして」

「そうですね。翔子ちゃんに知られたら、大変なことになりますよ」  
「？」

「……雄二、今のどじろじろとっ」

「げっ！ 翔子！ お前、いつからそこに！」

いつから居たのかわからない翔子に雄二がツッコミをいれた。

「・・・幼馴染には、神出鬼没のライセンスがデフォルトで備わってるの」

「そんなわけあるかあ！」

雄二は脱兎のごとくその場から逃げだした。

〈青空Side〉

「ふう」

トイレの洗面台で、顔を洗っていた。

「スッキリした」

……。それにしても、面白い学校だね、ここは。試験召喚獣システム、か。

試験召喚獣システム、通称、試召獣システム。そしてそれを使用して行なわれる、試験召喚戦争の正式名称である。

試験召喚戦争。通称、試召戦争。クラス間で行われるこの戦争は、文月学園を試験校として導入された、最先端技術により可能となった。

生徒1人に対して、召喚獣は1体。テストの点数がそのまま攻撃力とヒットポイントに換算される。つまり、高得点をとればとるほど、試召戦争では俄然有利になってくる。また、テストの点数に比例して、召喚獣の装備も変わっていく、高得点者にはオマケ装備として、特殊能力が使えるようになる、腕輪が召喚獣に装備される。

召喚戦争の基本的なルールに、戦争の勝敗は、テストを使用してれば、いかなる手段も問わない。とある。また、敗戦クラスは、勝ったクラスに対して、教室を明け渡す義務がある。要するに、教室交換である。因みに、決着をつける必要もなく、相互和平条約を締結することにより、教室の交換をする必要はない。

なお、決着をつけることを目的とせず、ただ単に今の実力を確かめ

るための、模擬試験召喚戦争も存在する。

条約の内容も様々で、相互和平条約や、相互不可侵条約などがある。

「召喚戦争か。面白そうだな」

「あれ？・・・坂本君、でしたっけ」

「ああ。よろしくな。鳳仙」

「ところで、どうして女子更衣室に？」

青空はあの長い説明の途中で、運動をすべく、更衣室に移動していた。そして、その更衣室になぜか、雄二がいた、ということである。

「あはは。それは、霧島さんに追いかけてるからだよね」

「黙れ！ 第一、何でお前までいるんだ！」

「いや、偶然だね、雄二」

「どういふ偶然があったら、女子更衣室で俺とお前が会うんだ？  
その法則を教えろ」

「あー。要するに、2人とも、変質者ってこと？」

根も葉もないいい方である。

「「「・・・・・・・・」」」

「先生！ 更衣室に変質者が！」

「なんだと！？ そこで待ってる！ 坂本！ 吉井！」

このやり取り、原作を見ても思ったんだが、よくこの2人だつてわかるよね。

「なに？ その理由はだな、あの2人しかそういうことをする奴がいないからだ！」

おっしゃる通り。御尤もごもつとまです。

「く。雄二、ここは逃げよう！」

「俺だけなら逃げる必要はなかったんだが」

「過ぎてしまったことはもう悔んでいたって仕方ないじゃないか！」

「お前のせいだろ」

「そもそも雄二が女子更衣室なんかなんかに隠れなければ、こんなことにならなかったのに！」

「俺のせいなのか？」

すると、後ろから、鉄人こと西村先生が猛スピードで追いかけてきた。西村先生は、Fクラスの担任で、趣味はトライアスロンという一風変わった先生。

「先生！ 噂では、先生の周囲1メートル以内は、気温が他より2度高いって噂ですよ！ って明久が言っていました」

「な、ゆ、雄二！ 僕を売ったな！」

「ふはは。俺だけが助かればいいのさ！」

「な、なんてひどい奴何だ！」

「おい、お前ら、言い合っているのは勝手だが、前を見てみる」

西村先生がそういって、2人が前を見ると、先生方（5人）が立っ

ていた。

「そ、そんな！」

「くっ、バカな！　せつかく明久を囷に逃げる作戦だったのに、お前のせいでぶち壊しじゃねえか！」

「それ、僕に言うべきこと？」

「お前らなあ、明日から学園祭だぞ？　少しは準備に専念せんか！」

2人とも鉄人に渴をいれられた。

「とりあえずお前ら2人とも補習な」

問答無用で2人を地獄の補習室に連れて行った。

一方の青空はというど。



「つて、え？ 明日から、学園祭？」

「はい」

「ある意味ラッキー」

おいおい。

「このクラスは何やるの？」

「喫茶店よ。これから、準備なの」

「あ、そういえばまだ10時なんだっけ」

読者のみなさん、文字数が多いので、もう既にかなりの時間が経過していると思った人も少なからずいるのではないのでしょうか。しかし、前話から数えて、まだ1時間ほどしかたっていないません。

？次回へ続く（ちびまる子ちゃんのナレーション風に）



### 第3話 学園祭直前

#### 第3話 学園祭直前

「ところで、どういうテーマで喫茶店を出すの？」

「執事&メイド」

「……は？」

「いや、だから、執事とメイド喫茶」

えーと要するに、執事とメイドの格好をして、お茶とか出すってことなのかな。

「でもどう考えても、メイドって3人しかいないじゃない？」

「え？ それって、姫路さんと秀吉と蓬萊さん？」

ドグツ。問答無用で美波の鉄拳が明久の鳩尾に入った。

「痛い！ 痛い！ 痛いよ、美波！」

「何でウチが入ってないのよ！」

「明久……。わしは男なんじゃが」

「因みに私は今日来たばかりだから、私の事を知るわけないわけだから、私じゃなくて美波でしょ？ 秀吉は別に否定しないけど」

「否定してほしいんじゃないが・・・」

「蓬萊はどうする？ メイドでも執事でもいいぞ」

「そうだね。じゃあ、執事で」

「わかった。しかし」

まひるの顔を見て、雄二が1つの疑問を吹っかけてきた。

「何でそんなに嬉しそうな顔をしてんだ？」

「ええ！？　そ、そう？」

うわ、顔に出てたんだ。恥ずかしい。

「あ、そ、そうだ！　執事服とメイド服は私が用意するね」

「え？　いや、ムツツリーニが用意を・・・」

「ううん！　私にやらせて！　こつこつとぐらいしかできないから！」

「お、おう。そ、そうか」

雄二が呆気にとられていた。

「さて。それじゃあ、早速用意をしなくちゃね。確か、系列にメイド喫茶と執事喫茶があったはずだから、頼めば人数分ぐらい用意してもらえるはずだから」

「待て。お前、何者だ？」

「何者って……。うん。お金持ち？」

「嫌みか？」

「お待たせしました、お嬢様」

執事がメイド服と執事服を持って、教室のドアを開けてやってきた。

「御苦労さま」

「それでは、何かご入り用でしたらまたお申し付けください、お嬢様」

「ありがとうございます」

「昼休み」

「それにしても、結構捗るな」

「さっし」

「あの、メニューはどうするんですか？」



「あ。それは、私が考えてみたから、後で教室に来て。それと、隣のEクラスの教室も使えるようになったから」

（1時間後）

「さて、やってきたわけだが。入って大丈夫なのか？」

「うん。どうぞ」

皆を教室の中に入れ、席に座らせた。

「一応、メニューは、この通りなんだけど・・・」

作られたメニューを全て、テーブルの上に置いた。

「待て。どこからテーブルが」

「先生が貸してくれた」

「（あの野郎ども。俺たちの言うことには何一つ耳を貸さないクセに・・・）」

「でも、結構多くありませんか？」

「そっ？」

メニューの多くは、ケーキやタルトなどのスイーツ。勿論、普通のメニューもある。

「じゃあ、これをどうぞ」

イチゴバナナタルト。

「お、結構うまいな。ん？　そういえば、どこで誰が作ってたんだ？」

「Eクラスを厨房にして作ってるんじゃないよ」

「へ〜」

「全部の作り方が書いてあってのう。それも見やすく」

「いいでしょ？」

「ああ。いい工夫だ」

「まだまだテーブルが少ないから、最低でもあと5台だね」

「ふむ。なら、オレたちがなんとかしよう」

「ありがとう」

「ううして、学園祭前日は過ぎ去っていった。

## 第4話 召喚大会

### 第4話 召喚大会

「さて、いよいよ学園祭当日となったわけだが・・・、鳳仙の協力のおかげで、なんとか1日で準備が終わった。御苦労さん。じゃ」

「待て待て待て！ 坂本！ いくらなんでも、それは投げやりすぎだぞ！」

「げっ。鉄人……。いつからそこに」

「坂本！ 鉄人って言うなって言うてるだろ！」

鉄人こと西村先生が、拳をパキパキならしながら坂本に迫っていた。

「お前ら、いい加減にまじめにやろうと思わんのか!!!!」

鬼のような形相で、Fクラス全員にどなり散らした。

「やってるじゃないですか！」

「黙れ！ 男がメイド服を着ながらそれを言っても全く説得力がないぞ！」

「はっ！ いつの間に！」

「お前は本当にバカなんだな」

「ヒドイー！」

「黙れ！」

ヒドイ言われようだ。

「そんなことより、お前ら、召喚戦争の1回戦が始まるぞ。出場する奴は早く行け」

今回の召喚戦争は、2人1組でトーナメント形式になっている。

「さ、行こう。明久くん」

「あ、うん」

明久と青空がペアで今回は出場することが決定した。

〈体育館 試召トーナメント・1回戦会場〉

「さー！ やってまいりました！ 召喚大会！ 1回戦第1試合を行いたいと思います！」

〈裏〉

「あ、吉井さんと鳳仙さんですね。試合が始まります。こちらへどうぞ」

2人は誘導の先生の指示に従って入場門に立った。

「頑張ろうね、明久くん」



「うん」

（会場）

「では！ 出場者の入場です！ Aコーナ―、2年Fクラス、吉井・鳳仙ペア！」

「対するBコーナ―、2年Cクラス、斎藤・紺野ペア！」

「あれ？ 女の子同士なんだ」

「何で1回戦が最低クラスなの？」

「何そんなにビビってんのよ。相手はFクラスなんだから！」

両者ともに睨み合いを始めた。

「さあ、試合開始前から白熱しています。それでは、召喚していただきましょう！」

「「「「サモン召喚！……！」」」」

4人の前に、幾何学模様が現れ、そこから召喚獣が現れた。

「今回使用される科目は、こちらです！」

司会の先生が、電光掲示板を指差した。

『科目・地理』

Fクラス 吉井 明久 45点 VS Cクラス 齋藤 真美

98点

Fクラス 鳳仙 青空 122点 VS Cクラス 紺野 秋

102点』

「え、Fクラスなのになんなの!? あの点数!」

「え? ああ、地歴は得意なんだよ」

Cクラスの2人が凄く驚いたような顔をした。

「(ふふ。2人とも驚いてるな。なんせ、僕すらも今まで知らなかったからね! 僕も驚いているんだ!)」

「明久くん、心の声絶賛ダダ漏れ中」

「「「「」」」」」

「さ、さあ。気を取り直して、召喚大会第1回戦第1試合・・・開始！」

第5話 召喚大会1回戦！

さて、突然で申し訳ありませんが、祝！ バカテス9・5巻発売！  
祝！ バカテス第2期、バカとテストと召喚獣につ、放送開始！

お見苦しいところをお見せしました・・・。

それでは本編へどうぞ・・・。

第5話 召喚大会1回戦！

「それでは、召喚大会1回戦、開始!!」

「じゃあ、よろつか。2人とも」

青空が笑いながらそう言った。

〈明久Side〉

青空の目が笑っていないけど、顔が笑っている。

〈相手Side〉

め、目が笑ってない！　なんか・・・怖い・・・。

「そ、そうね！」

何かやる気になってるー！？

「あ、そろそろ始めてください」

「「は、はい」」

〈吉井Slide〉

「じゃあ、行きます！」

斎藤さん(?)が召喚獣を操って、明久の召喚獣に攻撃をしてきた。

「くっ。もう！」

「全く。本当に猪突猛進は僕には一切当たらないよ」

「くっ。メタルスライムみたいなやつ！」

そこまで弱くない！　せめて、はぐれメタルにしてほしい。

「（どっちも変わらないと思うのは私だけだろうか）」

「違うよ！　経験値が違うじゃないか！」

「ぶっでもいいわ！」



「どうでもよくないよ！ はぐれメタルが12000なのに対してメタルスライムは1200なんだよ！」

「いや、本当にどうでもいいから」

ここで、相手の2人がちょっと変なものを見るような目で見ていることに気が付いた。

「あ、明久くん」

「……うん……」

「いつけー！」

明久の召喚獣が相手の召喚獣に向かって行った。

「え！？ あ」

ドカツ！ 明久の召喚獣が持っていた木刀で切りつけた。

『 19 』

相手に19点しか与えられなかった。

「くそっ」

「明久くん！ 気をつけて！」

「あ、うん」

「だあー！」

青空の召喚獣が大鉈を振りおろして、相手の召喚獣を真っ二つにした。

「キヤアー！」

「……え？」

「よそ見るなんて、よっぽど自信があるのね」

「え？」

ドーン！ 明久は相手の攻撃を喰らい、倒された。

「あ、明久くん……」

「い、いめん」

「……。。まあ、いいよ」

「そうね、あなたも私に倒されるものね！」

「それは……どうだろう」

「え？」

斎藤さんの召喚獣が青空の召喚獣に攻撃をしようと、突っ込んできたところに、逆にカウンターを喰らわせた。

「「「「」」」」

「先生？」

「あ、えと。吉井・鳳仙ペアの勝利です！」

こうして、1回戦は勝利を収めたのであった。

## 第6話 ピンチ

### 第6話 ピンチ

「ふう〜。疲れた〜」

「でも勝てて良かった〜」

「そうだね。そういえば、喫茶店はどっになってるのかな」

「さあ？ 確認してみる？」

〜Fクラス〜

「ただいま」

「おお。2人とも。どうじゃった？」

「うん。勝ったよ」

「よかったのう。そうじゃ。そういえば、雄二を見んかったか？」

「え？ 雄二？」

言われてみれば、Fクラス内に雄二の姿がない。

「うむ。Eクラスにもおらんのじゃよ」

Eクラスは、キッチンがわりに使っているクラス。Fクラス生徒以

外の立ち入りは厳禁。

「で、Eクラスに来たわけだけど・・・」

「・・・どうした？」

「あ、ムツツリーニ。雄二みなかった？」

「・・・見てない」

「明久くん、雄二の居場所がわかったよ」

「ええ!？」

「新校舎の屋上。昼寝してるみたい」



今さらだが、青空はお金持ちである。交通管制監視衛星を使っ  
て見つけた。

「……それを使えば……」

ムツリーニが何やらブツブツ言いながら良くないことを考  
えているように……。。

「言っとくけど、変なことには使えないからね」

「……何を……！」

「どうせムツリーニのことだから、ヒロイことを使おうと思っ  
てるんじゃないの？」

「……そんなことない（ぶしゃー！）」

鼻血を出しながら否定した。

「……。いこ、明久くん。新校舎の屋上」

「う、うん」

明久を連れて、新校舎の屋上に向かった。

く新校舎屋上く

「うわ。風が強い」

ぴらっ。青空のスカートが少し捲くれ上がった。

カシャカシャカシャ！　すると、どこからともなくカメラのシャッター音が聞こえてきた。

「・・・なんだ？」

「それは私のセリフなんだけど・・・」

「ムツツリーニ。いつからそこに？」

「・・・今来た」

鼻血を出しながら青空たちが屋上に来る前に来たことを否定し、最初からいたと証言した。

「異議ありiiiiiiiiiii!」

「雄二!」

「何でお前らがここにいるんだ!」

「それは、あなたが仕事をサボって、ここに来たからでしょ?」

因みに、サボるとは、フランス語の『サボタージュ』からきている  
そうです。

「それは、翔子から逃げるため・・・」

「ムツツリーニ！」

「・・・了解っ！」

いつになく力強い返事で雄二を捕らえにかかった。

「なに・・・！？」

バツ！ しかし、それをかわす。だが、彼は気づいていなかった。  
ヤツの存在を。雄二にとって一番の敵であり友であるアイツの存在を。

「バカめ！ 雄二いいいいい！」

「くっ」

明久がスタンガン（10万ボルト）を手に雄二に突進していったが、寸でのところで避けられた。

「あぶねえ！ 何で10万ボルトなんだ！」

「くっ。こうなったら、最後の手段だ！」

「・・・明久」

「うん」

携帯をおもむろに取り出し、ある人物を呼び出した。

7分後。

「なんなのじゃ？ 明久。用事というのは。全く。いまが忙しいという時に」

「まあまあ。それより秀吉、頼みたいことがあるんだけど、いい？」

「んむ？ わしにできることならいいぞい」

「それなら・・・(ゴニョゴニョ)」

「ふむ。いいじゃろづ。しかし、雄二に何かあったら、どっ回していくのじゃ？」

「それなら心配いらぬよ。鳳仙さんだっているし、あの子ならなれてるだろづし」

「うむ。そうじゃな」

2人が物陰でなにやら怪しげな相談をしていた。

「じゃあ、行くぞい」

秀吉がゆっくりと息を吸い込んで……。

「俺は、翔子よりも青空の方が好きだあー!!!!!!!!!!!!!!」

とんでもないことを言い出した。雄二の声で。知らない人や、忘れて  
いる人のために1つ。青空の読み方は、『そら』なので。

「それがどうした？　いくら叫んだところで、翔子はそれが秀吉の  
声真似だということ……」



突然、ドアがバンツ。といって、思い切り開け放たれた。

「……雄二、今のはどういふこと」

「し、翔子！ お前、仕事してたんじゃないのか……!?!」

「……青空がかわってくれた」

「くそっ！ 道理でいつの間にか鳳仙の奴がいなくなってるわけだ  
」!

「……雄二、今のはどういふこと……?」

「誤解だー!」

と叫びながら屋上を後にした。

「・・・逃がさない」

翔子も負けじと雄二を追いかけていった。なぜか、20万ボルトのスタンガンを持って。

第7話 雄二の災難

第7話 雄二の災難

「・・・雄二、どっ」

（更衣室）

「くそっ！ 明久のやつ！」

「やあ、雄二。偶然だね」

「……。てめえ。歯あ喰いしばれやあ！」

「ま、待ってよ。雄二！」

「何だ、クソ野郎！」

「扉の外に霧島さんがいる」

雄二がノーオー！ というような顔をして、明久の肩を掴み、泣きそ  
うな顔で、許してくれと言いたいような顔をした。

「……雄二、さっきの理由を聞かせて」

さっきのというと、秀吉の声真似で俺が何故か青空の事が好きだっ  
て公言されたことか。

「・・・吉井と抱き合ってた」

「まで！ どう考えてもおかしいだろ！？」

「そつだよ、霧島さん。僕と雄二がいつ抱き合ってたっていうのさ！ 第一、こんなむさくるしいヤツより、霧島さんや姫路さんと抱き合った方がマシだよ！ あ、秀吉もね」

「「・・・」」

「・・・吉井・・・？」

「明久、てめえ」

「戦略的撤退！ 鳳仙さん！」

「はいはい」

どこからともなく、青空が現れて、明久を連れ去った。

「どうでもいいが翔子、何を赤くなっているんだ？」

「・・・雄二」

「なんだ？」

「・・・燃えるのと燃やされるのどっちがいい？」

「サラバっ！」

脱兎のごとく、その場から雄二は走り出した。

「選択肢がおかしい気がするのは、俺だけか!？」

「あはは。ガンバ」

「おい、コラ！ 鳳仙！ 明久！」

「サラバ！」

「・・・雄二」

「くそっ！ 八方塞がりじゃねえか！」

雄二の逃げた先は、窓がない、廊下の隅だった。

「というか、袋のねずみなんじゃない？」

「おまえは！ 木下優子！」

「何を言っておるのじゃ？ 雄二」



「秀吉……？」

「そうじゃが……。しかし、雄一も酷いのう。わしと姉上を間違えるとは」

木下優子じゃない……。？ 秀吉……。？ いや。待て待て待て。おかしいだろ。何かがおかしい。

「今よ、代表」

「……うん」

ビュッ！ 翔子が縄を雄二に向かって投げた。

「やはりな」

「！！！！」

「サラバ！」

「あちゃー。逃げられちゃったね、代表」

「……翔子」

「うーん。こうなったら、彼らに手を貸してもらっしかないね」

「そうね」

↳ 体育館裏・プレハブ小屋↳

「どっ？」

「そうですねえ。今のところ、問題はなせそっぴですわ」

「そっ。ならよかった」

「さっぴいっぴいだったね」

「どうしたの？ 工藤さん」

そこに来たのは、工藤愛子、木下優子、霧島翔子の3人だった。

「うん。頼みたいことがあってね」

「あんたの力を借りたいんだけど、いい？」

「え？ うん。構わないけど」

優子が耳元で、助けて欲しい内容を話した。

「へいへい。任せなっつて」

一体、誰なのでしょう。

## 第8話 召喚大会2回戦

### 第8話 召喚大会2回戦

「あれ？ 雄二。どうしたの？」

「・・・明久。お前にこれをやろう」

「え？ あ、ありがとう。でも、何なの？ これ」

「ん？ ああ。たいしたもんじゃない。【放送禁止用語】だからな」

「「「「!!!」」」」

その言葉が出された瞬間、クラスの中が一気に殺意で満ち始めた。

「明久くん？」

「ア〜キ〜？」

姫路さんと美波が明久に笑顔だけど、鬼のような殺気を持たせながら、近づいてくる。

「えーと、姫路さん？ 美波？」

「明久くん。それを渡してください」

「そうよ、アキ。それはアキにはまだ早いんだから!」

美波と瑞希が明久に飛びかかり、【放送禁止用語】を奪い取ることをする。

〈5分後〉

「雄二iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

「おう。明久。どうしたんだ?」

「霧島さん! 出番だよ!」



「なに!?!」

明久が一步左にずれると、後ろから翔子が釘バットを持って現れた。

「ぬお!」

「・・・雄二、吉井の言ってたことは本当?」

「何の話だ?」

平然と嘘をつく雄二。

「・・・【放送禁止用語】を【放送禁止用語】で【放送禁止用語】

しながら【放送禁止用語】したこと」

「待て、翔子。それは、女子供が言っている言葉じゃないぞ！」

「……他にも、【ピー】しながら【スギューン】して【バギューン】するよな【放送禁止用語】をさっき持ってきて、【バビューン】しながら【ドギューン】しようとしてたって吉井が言った」

「何だと!？」 【ピー】しながら【スギューン】して【バギューン】するよな【放送禁止用語】をさっき持ってきて、【バビューン】しながら【ドギューン】しようとしてたって明久が言ったのか!？」

「……そう。【ピー】しながら【スギューン】して【バギューン】するよな【放送禁止用語】をさっき持ってきて、【バビューン】しながら【ドギューン】しようとしてたって吉井が言った」

「待て！俺は一切【ピー】しながら【スギューン】して【バギューン】するような【放送禁止用語】をさっき持ってきて、【バビューン】しながら【ドギューン】しようとしてないぞ！？」

放送禁止用語を連発する2人組。

「明久！」

返事がない。ただの屍のようだ。

「明久ー！」

返事がない。ただの案山子のようだ。

「くそっ！ 変わり身の術か！」

明久って何者なんだろうか。

「一方その頃Fクラス」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「お帰りなさいませ、お坊ちゃん」

青空はなぜかメイド服姿で接客をしていた。

「本日は、メイドのみで接客しています」

「「「「うおー!」「「「

「何でアンタ達が喜んでるのよ!」

「島田だ! メイド服着たら、胸の絶壁が隠せるからいいな」

「どづいという意味よ!...!」

美波が鬼のような形相で、Fクラスの男性陣に迫っていた。

「むう。なぜわしまで」

「・・・秀吉はまだまし。何故か俺まで」

「存外似合っておるぞ、ムツツリーニ」

「・・・嬉しくない」

「それより、明久はどうしたのじゃ？」

「ああ。召喚大会2回戦が始まるから、もう行ってるんじゃないの？」

そうすると、青空も既に見ないことに気が付いた。

〈召喚大会会場〉

「あ、2人とも。遅いですよ。さ、もう入場が開始されます。頑張ってください」

係の先生がそう言うと、スタジアムの方から大きな歓声が聞こえてきた。

「さあ、やってまいりました。召喚大会2回戦B試合。選手の入場ですー」

「さ、まじげん」

「頑張るよ、明久」

「20」



## 第9話 僕とちびっこと小学生

第9話 僕とちびっこと小学生

「む？ 早かったのう。どうしたんじゃ？」

「うん。相手チームが食中毒でね」

「む？ 食中毒じゃとっ？」

「うん。まさか、姫路さんの手料理があたったんじゃ」

「それはないじゃろっ。」

それなら良かった。というような顔を明久がした。

「じゃあ、入るよ」

「うむ。助かる。何か客が増えてきてのう」

「そう。なら、私も手伝うね」

「うむ。頼むぞい」

2時間後・・・

「おーい。お前ら。宣伝に行くぞ」

「あ、はい。えと、私は着替えた方がいいのかな」

「いいや。青空はそのままがいい。行くぞ。2人とも」

「うん」

（校庭）

「うわ。なに、これ」

「F15戦闘機だな」

「……。これ、自衛隊機じゃないの？」

「……あつちはRF4E」

「……。ムツツリーニ。無言で現れるのは止める」

雄二が平然にムツツリーニに言った。

「……F2とF4もある」

「お前が作ったのか……？」

「……秀吉の写真と交換してきた」

「待つんじゃない。ムツツリーニ。それは一体どういふことじゃ？」

「……」

「しかし、それはバレると、貸してくれた自衛官どころか、お前も捕まるぞ?」

「・・・その心配はない。既に航空幕僚長に許可を得ている」

「それはなおさら危ない気がするが・・・」

「別にいいんじゃない? 捕まるのは、ムッツリーニくんだけなんだから」

「まあ、そつだな」

満場一致。

「さて、次行くか」

「うん」

↳新校舎1階↳

「貴様ら！ 何やってるか！」

「げっ。鉄人！？ 逃げろ！」

「なぜ逃げる必要が・・・」

「あ、そういえばそうだね」

確かにという顔で鉄人こと西村先生が頷いていた。

「で？ 鉄人先生。何の用ですか？」

「吉井。先生をつけねばいいというものではない」

「え。だって、鉄人と呼ぶなっていつも言ってるから」

「吉井！ 歯をくいしばれ」

「なんで!？」

「しかし、貴様らはここで何をやっているんだ？」

吉井をぶちのめした後、青空の方を向いて、そう問いかけてきた。

「宣伝です。旧校舎の更に目立たない部分にありますからね。そのため、売り上げを伸ばすために、こうして宣伝をしているんです」

「なるほど。頑張れよ」

「はい」

「しかし、鉄人はどう考えても依怙贖罪をしているきがするんだが」

「君たちがいつも素行が悪いからじゃないですか？」

「あ、ナレーションの人（注）」

「福原です」



「ああ。そうだった。福原先生。どうかしたんですか？」

「いえ。君たちと西村先生が話しているのが見えたもので、気にな  
って」

「安心しろ。俺たちは何もしていない」

「本当ですか？ 鳳仙さん」

「え？ あ、はい」

「そうですか。それなら頑張ってください」

福原先生もどこかへ去っていった。

「おっと。もうそろそろ店に戻るか」

「うん」

くFクラスく

「んむ？ 雄二はどうしたのじゃ？」

「トイレに行って来るって」

「ふむそうか」

すると、廊下から声が聞こえてきた。

「おや？ どうしたんだ？ ちびっ子」

「ちびっ子じゃないです！ あ、それより、聞きたいことがあるです」

「ふむ。なら、ここでは何だから、こっちに来て」

ガラッ。

「お。坂本。可愛い子だな。お前の妹か？」

「君可愛いね。10年後位に俺のお嫁さんにならない？」

「いや、むしろ俺は今の方が」

むう。誰か来たみたいだけど、野郎共が邪魔で見えない。

「あう。人を探しているです」

「人を、か」

「はいです。お兄ちゃんを探しているです」

「名前は？」

「名前は・・・わからないです」

「身内じゃないのか。それなら、特徴は？」

「えっと、バカなお兄ちゃんです」

なんともまあすごい特徴だ。

「そうか。たくさんいるんだがな」

雄二が振りかえって、Fクラス男子全員を指差した。

は、反論できない。

「あ、そうじゃなくて、えと。すごくバカなお兄ちゃんなんですっ  
！」

「「「「吉井だな」」」」

「嫌だな！ 僕泣いてないよ！」

「第一、何かの間違いだよ！ 僕にそんな小さな女の子の知り合いなんているわけがないじゃないか！」

「あ、バカなお兄ちゃん！」

タタタツ。ドゲツ。

ぐふっ。み、鳩尾に頭が。

「じゃなくて、君、だれ？」

「あつ。ヒドイです！ 葉月、一生懸命バカなお兄ちゃんはどこですか、って聞いてきたのに！」

女の子が泣き始めてしまった。

「ファーストキスもあげたのにー！」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「み、美波！？」

「瑞希、そっちを持ってて。うちは関節を外しまくるから」

「み、美波！？ 姫路さんもやめるんだ！」

「土屋。包丁を5本持ってきて」

へ？ 包丁？

「あの、美波？ 包丁なんて、何に」

「え？ 包丁って、人を刺す以外に使い道あるの？」

クソッ！ 脱兎のごとく逃げ出したい！

「大丈夫よ。死なない程度に心臓にさしまくるから」



「美波！ それはどう考えても1回目で僕は死んじゃうよね!?!」

「なら、3本刺した時点で許してあげるわ」

「刺さないって選択肢はないの!?!」

「あ、お姉ちゃん」

女の子が美波に向かって挨拶していた。

「お姉ちゃん・・・?」

お姉ちゃん……。

「あ、そつか！ あの時のぬいぐるみの子か！」

「むう。葉月です！」

「そつかそつか。久しぶりだね、葉月ちゃん」

「あれ？ アキってば葉月のこと知ってるの？」

「え？ 美波こそ、葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、うちの妹だもん」

「ええ!？」

第9話 僕とちびっこと小学生(後書き)

続く！

(注) 福原先生は、担任が鉄人先生に移った後、ナレーションがメインとなりました。

## 第10話 噂

### 第10話 噂

「は、葉月ちゃんが美波の妹!？」

「そうよ? 言ってなかったっけ?」

「初めて聞いたよ!」

「あら、そう。なら、今言ったわ」

「あ、綺麗お姉ちゃん。ぬいぐるみ有難うございました！」

「はい、どういたしまして。可愛がってくれてる？ 葉月ちゃん

「はいです…！」

「あれ？ 姫路さんも葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「え？ あ、はい」

ん？ 何で言葉に詰まったんだろう。

「明久」

「なに？ 雄二」

「ああ、ちよつとな」

雄二に呼ばれて明久が教室の外に出て行った。

く廊下く

「どつしたのさ、雄二」

「妙だと思わねえか？」

「え？ 何が？」

「客の少なさだ」

「え？　そういわれてみれば、少ない気がするけど・・・」

明久が教室を除いて、客の入りを確認した。

確かに、テーブルの割には、客の出入りが少ない。

「恐らく、どこかで何かをふりまわしているやつがいるんだろ」

「ふりまわすって何を？　釘バットとか？」

「んな奴いまどきいねえよ！　ちげーよ。よくない噂をだ」



「良くない噂って？」

「俺たちは、Eクラスを借りているとはいえ、Fクラスだ。よくな  
い噂が流れてもしかたねーだろ？ 調理にはFクラス使ってるしな」

ああ、そういうことか。という風に手を叩く明久。

「あれ？ 明久、サボり？」

「ち、違つよ！」

「なら早く戻つてよ。いくらお客さんが少ないとは言つても、ボ  
イなんだから」

「はい」

「雄二も」

「あ、ああ」

こうして、雄二と明久は教室に戻っていった。

「そういえば、鳳仙」

「ん？ なに？」

「お前から見て、この客の入りの悪さはどうみる？」

「ん？ お客の入りの悪さ？」

「ああ」

青空は、少し何かを考えるように顎に手をやった。

「恐らくそれは・・・」

「バカなお兄ちゃん！」

「ん？ どうしたの？ 葉月ちゃん」

「葉月、ここに来る途中でいろんなことを聞いたよ」

「いろんなこと？」

「はいです。Fクラスはバッチイから行っちゃだめだとか、食中毒が出るとか」

それを聞いた瞬間、ものを言わせず、雄二が葉月に飛びかかった。

「おい、ちびっこ！ それはどこで聞いた！」

「えと、綺麗なお姉さんたちがいっぱいいるところですよ」

「何だと!?!」

「雄二！ これは何としても、調査に行かなくては！」

「そうだな！ 明久！ これは、やましい気持など一つもない、ただの調査だよな！」

「うん！ そうだよ、雄二！」

明久と雄二は颯爽とそのクラスに走っていった。

「アキ、サイテー」

「明久くん、ヒドイです！」

「お兄ちゃんのバカー！」

「3人とも行かないの？」

「「「行く！」」」

「じつじつ、皆でそのクラスに向かうこととなった。」

第10話 噂（後書き）

サブタイが思いつかなかったんで、適当につけました。すみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0941u/>

---

バカとテストと召喚獣 Original Story

2011年8月3日06時34分発行